

令和元年度 自己評価実践報告書

学 校 名 福島県立好間高等学校

I 自己評価の概要

1 『学校経営・運営ビジョン』(別紙1参照)について

前年度の学校評価結果に基づき、令和元年度の教育目標及び重点努力目標を協議し、全職員共通理解のもと「目指す生徒像」を実現するため各項目のねらいを下記のとおり確認し、4つの重点目標を策定した。

<重点目標1> 「自らを律する力を鍛えます」

規律ある学校生活を送らせるために、全職員共通理解のもと指導体制を構築し、安全教育やあらゆる教育活動の中で徹底した生徒指導を実施し、基本的生活習慣の確立を目指す。

<重点目標2> 「学ぶ力を鍛えます」

授業時数の確保、基礎学力養成問題集の有効活用、総合的な学習の時間の計画的運用により、基礎学力向上と家庭学習の習慣化を図る。また、組織を有機的に連携させ、各種資格取得の推進を図るとともに、計画的な進路指導を展開し進路実現を目指す。

<重点目標3> 「心と身体を鍛えます」

部活動、生徒会・委員会活動、ボランティア活動等を積極的に推奨し、生徒自らがそれらの活動の意義を実感・体験できる体制を構築する。また、国際交流にも参加させ、グローバルな人材と豊かな心を育成する。

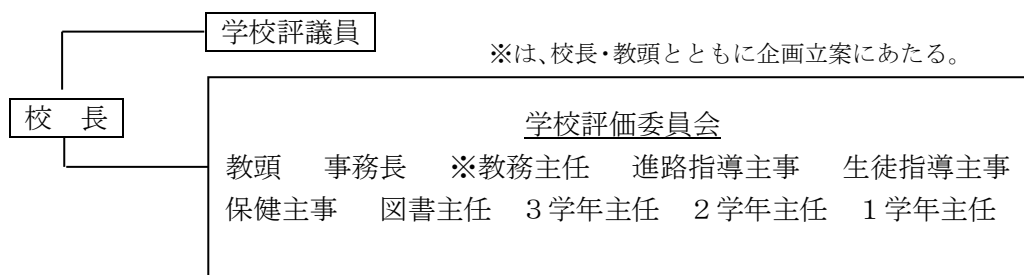
<重点目標4> 「保護者や地域との連携で鍛えます」

学校・家庭・地域の三位一体となった教育活動を展開するため、教育活動の情報を積極的に地域に発信するとともに、諸団体との連携を一層密に相互協力体制の構築を図る。

2 校内組織体制について

校務運営委員会が学校評価委員会を兼ねる。教頭及び教務主任が企画立案を行い、事業が円滑に進行するよう評価事業の効率化を図った。

【組織図】



3 自己評価年間計画について

- (1) 平成31年度学校評価事業計画 (別紙2-1、2-2参照)
- (2) 好間高等学校における学校評価システム (別紙3参照)
- (3) 自己診断カード (別紙4-1、4-2参照)
- (4) 評価のねらい
 - ① 学校評価の概念が、学校を外部に開くことであることから、自己評価や外部評価をとおして、学校を不断の改革・改善の緊張感の中に置くことができる。
 - ② PDCAサイクルを、学年・部等の校務分掌や自己の授業実践の中で取組み、組織力や自己変革への意欲の高揚を図る。

II 評価結果の概要

1 実施方法等

項目	年度末評価			
	実施部署	評価	実施方法	コメント
生徒	学校評価委員会	4段階評価(A～D)	自己診断カード	生徒の実態と課題を把握し改善へ向けた方策等の資料とした。
教職員	学校評価委員会	4段階評価(A～D)	自己診断カード 校務分掌ごとのアンケート	教職員の意識改革と「本校が目指す生徒像」実現へ向けた一助となった。
保護者	学校評価委員会	4段階評価(A～D)	アンケート	自由記述欄も併用し、保護者の学校に対する期待や要望の把握に活用した。
学校評議員	学校評価委員会	意見聴取等	評価書	地域社会が本校に寄せる期待や評価、さらに本校が目指す教育活動について明確に把握することができた。

2 アンケート及び回答数

	中間評価のためのアンケート			年度末評価のためのアンケート		
	対象者	回答数	割合(%)	対象者	回答数	割合(%)
教職員	19	19	100	19	19	100
教職員以外	生徒	200	200	211	211	100
	保護者	—	—	211	187	88.6
	学校評議員	—	—	3	3	100

アンケートの回答率は、生徒・教職員共に100%の回答を得た。また、保護者については、平成22年度より年度末のみで目的が充足できることを確認したため1回の実施とした。本年度の保護者からの回答率は88.6%と、昨年度(77.7%)と昨年度と比べ向上した。アンケートによる保護者の意見を反映させ、家庭と連携しながら、よりより学校作りを実践したい。

3 評価基準について

評価基準	A	B	C	D
教職員	大変優れている	やや優れている	やや劣る	劣る
生徒	とてもそう思う	そう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
保護者	大変良い	良い	あまり良くない	良くない

評価基準は、教師及び生徒による自己診断カード及び保護者のアンケートにおいて、目標達成を客観的に段階評価し、新たな目標設定をするための指標となる。4段階評価は本校の現状分析には妥当性があり、傾向を概ね的確に捉えることができた。平成25年度からの学級減により、部活動再編を行った。本校教育の礎である鍛える教育の元、本校の教育活動内容や学校評価の目的等の説明を周知し、今後も本校での教育活動全体をさらに透明化し、家庭や地域等の外部の力を取り入れ

ながら、家庭、地域、学校が一体となった教育を進めていく。

4 年度末評価のまとめ

(1) 年度末評価実施の目的

- ① 教職員、生徒、保護者が、それぞれの立場から1年間の教育活動を評価し、自己評価の客観性・透明性を高め、開かれた学校づくりに努める。
- ② 学校、家庭、地域が一体となり現状把握と課題解決へ向け共通理解を深め、様々な角度から検証し学校運営の改善を促進する。
- ③ 学校が、自らの教育活動や学校運営について、継続的に組織的な改善を図り、学校評価の実施と結果の公表により、適切に説明責任を果たすとともに、教育活動全般において、保護者や地域等から理解と参画を得て、その連携・協力による学校づくりを進める。

(2) 年度末評価結果

- ① 令和元年度各学年・各部・各教科に関する努力目標及び評価（別紙5参照）
- ② 令和元年度教員自己診断カード集計結果（別紙6参照）
- ③ 生徒アンケート集計結果（別紙7参照）
- ④ 令和元年度学校評価保護者アンケート集計結果（別紙8参照）

(3) 各努力目標についての考察（学校経営運営ビジョンの①～⑯に対する考察）

<1 自らを律する力を鍛えます>

① 服装・頭髪指導について

ア) 毎朝の昇降口での声かけ等により、あいさつの励行、遅刻の防止、生徒の現状把握ができた。

イ) 服装検査は、かなり細かな点まで検査・指導するため、大きく乱れる生徒はいなかった。

ウ) 1年間に8回ほど服装・頭髪指導に行い、決まった生徒が常に再指導されている姿が見受けられた。また、例年ではあるが、夏休み、冬休み中に頭髪を加工し、休み後の服装・頭髪検査で改善するように指導される生徒が今年度も一部に見受けられた。

エ) いじめアンケートで面談希望者や、養護教諭の勧め等で、カウンセリングが必要と思われる生徒に継続的に声をかけSCにつないだ。SCからの助言や、自分の言葉で状況を説明することにより、生徒自身も自分の置かれた状況を客観的に捉えることができているようにみえる。

オ) 4月の交通安全教室は、生徒体験型でわかりやすかった。自転車の点検・保険の加入の確認、ステッカーの確認等、細かく実施することができた。

【方策】

- ・年度初めに生徒指導部会、職員会議等を通じて、指導基準等の共通理解を職員間で確認する。また、全ての教育活動において、複数の先生方で公平な目で指導に当たる組織力の強化に努める。さらに、生徒には、服装検査だけでなく、服装検査後にも別な先生からでも指摘された場合には、素直に先生の指示に従い、服装・頭髪を直すように生徒にも伝える。
- ・長期休業中の生活について、集会、保護者会、文書等を通じて指導だけでなく、普段から好間高校生としての自覚と責任を持たせる指導を充実させ、進路目標の早期樹立など目的意識の高揚を図る。また、頭髪を染めるなどの加工をさせない指導も行う。
- ・進路が決まった生徒に対しても、あくまで内定であり決定でないことを生徒に伝えるとともに、卒業まで家庭の協力を得ながら先生方も根気強く指導を行う。
- ・繰り返し指導をしても改善しない生徒に対しては、家庭訪問や面談等を活用し、保護者に学校の指導方針にご理解とご協力を得られるような体制の強化に努める。

② 欠席・遅刻・早退について

ア) 令和元年度12月末日までの状況は、以下の表の通りである。昨年度と比較して、欠席は減少したが、遅刻、早退は若干増加している。それでも一昨年よりは大幅に減少し、基本的な生活習慣が身につけてきたことが窺える。今後も食生活も含めた規則正しい生活習慣の確立について担任を中心として、保健厚生部や生徒指導部等と連携しながら学校全体で、改善の方策を探りたい。生徒の遅刻の主な理由は「家を出るのが遅かった」「寝不足による体調不良」、「不規則な食生活による体調不良」、「寝坊」、「歩くのが遅かった」、等基本的な生活習慣の乱れによるものが多く占めている。また、欠席の理由は体調不良が殆どであるが、その中身について深く考察し、適切な指導により改善される可能性を見いだしていきたい。

	遅刻	早退	欠席
1年1組	22 (60)	13 (20)	54 (139)
1年2組	31 (52)	22 (24)	76 (70)
2年1組	94 (70)	21 (24)	90 (212)
2年2組	103 (130)	28 (10)	162 (175)
3年1組	114 (44)	16 (26)	124 (106)
3年2組	113 (55)	18 (12)	157 (128)
平均	79.5 (68.5)	19.6 (18.3)	110.5 (138.3)

※ () 内は昨年度

【方策】

- ・特に遅刻の多い生徒に対しては、段階的に指導を行った。遅刻届の窓口である教頭が直接指導を行うことにより、生活習慣の改善も含め指導を行った。
- ・欠席、遅刻をする生徒は、生活習慣の乱れが感じられた。1日の生活リズムの改善を個別面談や家庭との連携を深め指導していく。
- ・時間の厳守は学校生活や進路実現への大切なポイントである事を再認識させ、生徒には様々な機会を捉え、基本的な生活習慣を確立させる指導を根気強く行う。
- ・遅刻数の多い生徒に対しては、学期末に保護者に来校してもらい、教務主任、学年主任及びクラス担任が指導を行う。
- ・家庭の経済状況によりアルバイトを行っている生徒については、過度な負担になっていないか、学校生活の妨げとなっていないか、支援と観察を強化する。

③ 生活指導について

ア) 生徒が生活行動を振り返ることを目的とした「生徒指導カード」の導入から8年が経過した。学校全体で制度の見直しを求める意見もあるため、生徒指導の在り方についてよりよい方向性を今後も検討していきたい。

イ) 人事異動により先生方も変わり、生徒指導の共通理解を図るのが困難になってきている。より効果的かつ実効的な生徒指導の在り方について今後も検討していきたい。

【方策】

- ・指導方法について教職員間で確認しながら共通理解のもと指導が出来る体制を目指し、複数の先生方で公平な判断で指導に当たる組織力の強化に努める。
- ・「生徒指導カード」を導入するに至った経緯に立ち返りながら、いじめや虐待、交通事故増加など学校を取り巻く環境の変化に対応できる体制を作っていく。
- ・落ち着いた学校生活を送るためにも、家庭と連携しながら、集団や社会の一員として自覚と責任感を深め、日常生活からルールやマナーを尊重し、お互いに注意し合ながら学校生活を

送り、生活面の些細なことでも教員から指摘されない生活を目指す。

④ 挨拶の励行について

ア) 今年度は生活委員達が主導し月の初めに生徒昇降口に立ち、挨拶の励行を促した。

イ) P T A主催の朝の挨拶運動（生活委員も一緒に参加）もあって、大部分の生徒は校内・校外を問わずしっかりと挨拶の励行に努めている。

【方策】

・朝の挨拶で生徒達の様子を観察し、気持ちよく一日をスタート出来るように元気よく挨拶できる習慣を身につけさせる。挨拶はしているが、声が小さく、覇気のない挨拶をする生徒もいるので、自然とある程度の声の大きさを挨拶ができる学校となるようにP T A活動、生徒会委員会活動をうまく機能させ、教師自らも率先して挨拶の励行に努める。

⑤ 清掃活動等について

ア) 清掃時には全校生徒、全職員が一斉に清掃を行う。年度当初は行き届かない箇所も見られたものの、教職員の熱心な指導により徹底されつつある。ゴミの分別もしっかりと行われており、また、床の素材に関係するが、清掃はしているものの汚れが目立つ箇所もある。

イ) 教室内の私物の整理整頓、特に机の上、椅子の上、その周辺に教科書等が置いてある。また、飲食後のごみの後始末、特にペットボトル、空き缶、紙パックをゴミ箱に入れず教室、自転車置き場等に放置する生徒がいる。

ウ) 教室移動時に、教室が施錠されていない場合が散見される。

エ) 敷地内のゴミのポイ捨てが見られる。

【方策】

- ・個別ロッカーの使用により、私物の管理を徹底する。
- ・全教職員監督の下での徹底清掃、教室内外の整理整頓の指導、私物の管理と不要物の持ち込みを禁止する。また、トイレ等、校舎をきれいに使用する指導も行っていく。
- ・教育環境整備は学力向上の基本である。朝、帰りのSHRだけでなく授業でも、担当者が教室内の整理整頓、私物の管理及び整理整頓については根気強く指導を行い、落ち着いた環境で学校生活を送れるように、校内外の清掃徹底に努める。
- ・安心した学校生活を送れるように盗難防止に努め、教室移動時における教室の施錠を呼びかける。また、高価な物、不要な物は学校に持ち込まない指導も行う。やむを得ない場合の保管先も徹底する。

<2 学ぶ力を鍛えます>

① 学力向上について

ア) 個別の能力に応じてきめの細かい指導を行い、3年連続で国公立大学の合格者を輩出することができた。担当者のみならず学校全体で連携できたことによる成果と考えられる。

イ) 家庭学習についてのアンケートでは、「毎日学習している」生徒をみると、1学年の学習習慣の定着率が低いようである。具体的には、年度末（1月末）のアンケート結果では、1学年が13.5%、2学年が16.8%、3学年が20.0%の生徒が毎日学習している結果となった。また一方で、「家庭では学習しない」生徒の割合は、1学年が8%、2学年が24.6%、3学年が28.3%となっている。その主な理由は、「授業で十分理解できる」「時間がない」「教科書等を持ち帰らない」「ゲームの方が大事」「アルバイトが忙しい」「寝てしまう」「勉強が嫌い」「暇がない」「テスト前でしかやらない」「だるい」「眠い」「もう必要がないから」「もう勉強あきらめた」「やるきない」「スマホ」「つまらないから」などの理由があげられた。

ウ) 本校生の基礎学力向上と家庭学習の定着を目的として作成したオリジナル問題集「ステップ1・2・3」を活用し、学習の成果を問う基礎学力養成テストを毎年実施している。今

- 年度は基礎学力養成テスト前に課題のチェックを行ったため、昨年度よりは提出状況もよく、多少ではあるがテストの結果にも反映されていた面が見受けられた。また、問題集の課題未提出者や学力に不備のある生徒に対しては、放課後等を利用して勉強会を開催した。
- エ) 英語科によるT T授業、数学科による少人数授業等を取り入れ、生徒一人一人にきめ細やかな指導を行っている。
- オ) 教職員の根気強くかつきめ細かい指導により、多くの生徒は課題を提出するようになった。しかし、依然として課題を期日までに提出しない生徒も一部で見受けられる。
- カ) 年を追うごとに、生徒間での学力差が拡がり、すべての教科で中学校段階までの学力が不足している生徒が多く見受けられる。
- キ) 進路指導部が年度当初に全生徒に対し希望調査を実施し、「学力向上のための講座」を行っている。講座に参加している生徒は、意欲的に取り組み、校内においても好成績を収めている。
- ク) 授業中に居眠りや、授業に集中できない生徒が一部で見られた。また、教科書等を学校に置きっぱなしにし、自宅で勉強している姿が見受けられない生徒が多い。
- ケ) 出張・休暇等への対応は、事前に授業交換等を行い、授業時数の確保に努めていた先生が多く見受けられるようになってきた。
- コ) 大学受験や就職試験等における小論文に苦慮する生徒が多い。
- サ) 生徒への読書の推進が課題であるため、図書部の先生方が生徒の興味・関心を持つ図書を様々な方法で広報している。蔵書の整理を行い、利用しやすいように管内のレイアウト等も考えながら、図書館の整備を行っている。さらに、図書室で勉強する生徒の姿も多く見受けられる。
- シ) 昨年の32年ぶりの福島大学合格者に続き、今年も、福島大学合格者を輩出することができた2年連続の合格者である。学校全体の組織的な取組によるものが大きい。今後も今年のような取り組みを継続させ、来年度も国公立大学の合格者を輩出したい。
- ス) 互見授業週間を2回設定し、お互いの授業を見学し授業内容について研鑽する姿が見られた。
- セ) 図書館においてICTを活用し、効果的な授業を展開することができた。

【方策】

- ・職員室脇の廊下に机と椅子を設置し、冬にはストーブも設置し生徒達が比較的いつでも教員の指導を受けやすいスペースを確保した。
- ・生徒の好奇心を刺激し、学習意欲を高める授業を行うことで、毎日の家庭での学習に繋げていく。
- ・教科内での授業研究や、研修会等への積極的な参加を推進し、わかる授業や指導力の向上、生徒の可能性を引き出す指導法等の研究に努める。
- ・つまづきのある生徒に対しては、少人数指導等のきめ細やかな根気強い指導を継続的に行う。また、英語科によるT T授業、今年度からは数学科による少人数授業等を通して、わかる授業、学習への達成感を生徒に味わせるとともに、剥がれ落ちる知識とならないような指導を行い、学習内容の定着を図る。
- ・遅刻指導と同様に、提出物に対しても提出期日を守らせる指導を今後も根気強く行う。
- ・空き教室を自習室として開放し、1年次から放課後の時間を、自学自習の場、教員の指導を受ける場として活用するなどの環境整備を進める。
- ・各学年、各部、各教科と連携をとりながら、1年次から計画的に大学受験、就職試験等に対応するための小論文指導の充実を図る。
- ・「図書館だより」などを有効に活用し、個人利用の促進、授業での活用、自習室としての活用等、今後も更に利用、活用しやすい図書館にするための整備を進めていく。また、生徒の

読書への推進に関しても、今後良い方法を考えていきたい。

② 進路指導について

- ア) 定期的に「進路だより」を発行し、進路に関する情報提供や資料の収集と分析を行うことにより、リアルタイムに生徒や保護者へ進路状況等を提供することができた。特に、「進路の手引き」や「マイステップ」については、進路ガイダンスを通じて利用を促進し、クラス担任もHR活動等で積極的に活用していた。
- イ) 3年間を見通したキャリア教育の充実を図るため、学年が教務部及び進路指導部と連携しながら、総合的な学習の時間の指導計画にキャリア教育を入れ、計画通りに進めることができた。
- ウ) 今年度も夏休みの期間に、小型車両の講習会を開催し、資格取得の支援を行った。
- エ) 今年度も進路指導部の先生方が分担して3年生全員に対して個別面接を、また全職員による就職及び進学における面接指導を実施し、生徒の進路実現の一助となった。
- オ) 「学力向上対策講座」等を企画し、生徒の大学進学等の進路実現に向けた支援を行った。当初は受講を希望している生徒も、徐々に講座の参加人数が減り、継続して受講する生徒は依然として少ない。
- カ) 公務員希望者以外の就職希望者、大学・専門学校進学者は全員の進路実現を図ることができた。3年連続国公立四年制大学合格により多くの新聞等でこの快挙を讃えていただいた。後輩に良い影響を与えるとともに、今後も継続して合格者を輩出できるように、学校全体の組織力を活かして取り組んでいく。
- キ) 今年度のインターンシップにおいては、進路指導部、学年、担当者がうまく連携をとって実施することができた。
- ク) 生徒が気軽に進路指導室に来やすい環境整備を行った。

【方策】

- ・3年生全員に対して5月上旬より面談を行い早期の進路意識の高揚をはかった。
- ・入学時からの進路に関する意識、進路目標の早期確立のための進路ガイダンスの持ち方の検討、活用しやすい資料の提供とともに、小論文をはじめとする進路にかかわる指導等を1年次から行う。
- ・教務部と連携し、放課後等の時間を有効に活用し、基礎学力の定着を含めた学力の向上に努める。また、受験間際になって慌てて取り組むのではなく、計画的に取り組めるように、学年や教科と連携しながら今後も支援していく。
- ・進路実現につながる資格取得に対する支援を次年度も引き続き行っていく。
- ・次年度も、本人の希望や適性に沿った進路実現を図り、離職者等が出ないような進路指導の充実を図る。国公立の四年制大学への進学者を輩出するための進路指導、具体的には課外授業等における教科指導を徹底していきたい。
- ・インターンシップまでの指導についてさらに改善を加え、生徒にとって充実したものにするように努力する。

<3 心と体を鍛えます>

① 部活動・生徒会活動について

- ア) 台風19号により施設の一部(体育館、グラウンド)が浸水し教育活動に影響がでてしまったが、各方面からのご支援と教職員の熱心な取組により、効果的に授業や部活動を実施し、心身を鍛えることができた。
- イ) 公開文化祭を開催した。台風19号被害の影響により開催が懸念されたが、生徒会が中心となり綿密に準備を進め盛大に開催することができた。特に本校OBのサプライズ参加や

地域連携企画は大変好評であった。

- ウ) フラダンス部が福島民報社主催「第5回ふくしま産業賞 学生奨励賞」を受賞するなどの活躍が見られた。他の部においても活発に活動する生徒が徐々に多くなり、校舎内外において活発な活動が見られた一年であった。
- エ) 今年度もフラダンス部等が中心となり、地域行事参加やボランティア、仮設住宅慰問に活躍している。特に、地域、年齢、立場を超えて多くの方々との交流を通じ、「豊かな心」を育むことができた。
- オ) スポーツ大会、校内文化祭において、生徒会役員及び実行委員会を中心に、全校生徒一人ひとりが活躍する姿が見受けられた。また、生徒会役員においては各地災害の義援金の募金活動、生活委員会においては生徒会役員とともにPTAの朝のあいさつ運動に参加、いわきの街をきれいにする市民総ぐるみ運動においては生活委員と保健委員がサポートをするなど、地道ではあるが昨年度よりは各委員会において積極的に活動する姿が見受けられた。

【方策】

- ・各方面よりアドバイスを頂き、教職員と生徒によるひたむきな取組により、校舎内以外の施設を整備し敷地内のスペースを有効に活用し、工夫を凝らし授業や部活動を展開した。
- ・公開文化祭に向けて実行委員会を組織し、生徒、教職員、保護者、地域が綿密に連携しやすいように組織化し、バックアップ体制も整備した。
- ・部活動の活性化を図るため、活動方針を示し、活動のあり方について理解を深めた。今後も本校の状況を踏まえながら継続して検証を行っていき、本校の特色化、魅力化へとつなげていく。
- ・一日体験入学、学校説明会、ホームページ等で、本校部活動についてアピールをし、部員の確保に努める。
- ・今後も地域行事への参加、福祉施設等への慰問やボランティア活動、様々な体験活動を通して、他を思いやる心、豊かな心を育ませる。
- ・学校行事、生徒会活動等においては、一人ひとりの生徒が活躍する場をできるだけ多く提供していく。

② 健康・安全教育について

- ア) 保健厚生部が中心となり健康・安全について積極的に呼びかけた。特に感染症流行の時期には各種の予防対策を講じた。
- イ) 養護教諭が毎月1回「保健だより」を発行し、規則正しい生活習慣や健康についての意識の高揚を図った。また、様々な要因を持った生徒もいるため、集団だけでなく個人に対しての保健指導も積極的に行った。
- ウ) 「う歯」の治療に必要な生徒が例年入学生に多くいるため、本校歯科医にご協力をしていただき1年生に対し歯科指導を行った。また、「う歯」の治療について、保護者宛文書を送付し促進に努めているが、通院治療をしない生徒もいる。
- エ) 防災訓練「地震発生・火災発生時を想定」を2回実施した。2回目は台風19号による水害直後だったため消防署からの講師はお願いできなかったが、磐水社の方をお願いし、消火訓練も行った。生徒たちの訓練に取り組む姿勢と態度が素晴らしかった。
- オ) 「薬物乱用防止教室」「保健講話」を開催し、薬物の危険性、性感染症等について生徒が真剣に向き合い考える機会を持つことができた。
- カ) 今年度も交通安全教室を自動車学校の協力により体験的内容を実施し、生徒はより身近な問題だと考えさせるとともに、特に自転車のマナー育成の高揚の一助となった。
- ク) スクールカウンセラーが週1日配置されており、教職員の相談（ケース会議を開くなど）

等に対し、熱心に応じていただいている。また、生徒の悩みに親身になって生徒と面談をしていただき、悩みを持つ生徒への支援にも繋がっている。さらに、新入生の全員面談は効果的であったため、今年度も夏休み明けに1年生全員の面談を実施し、クラス担任との連携を深め、クラス運営にも大いに寄与した。

【方策】

- ・今後も規則正しい生活習慣を身につけさせ、健康な生活を営む上で必要な知識や考え方を「保健だより」や講話等を通してさらに高めていく。また、今後も集団だけでなく個人にも個々の保健に関する問題に対して積極的に保健指導を行っていく。
- ・個人の健康管理が集団の健康につながる意義を、保健の授業やホームルーム活動等で取り上げ、特に「う歯」の治療や健康診断等の重要性を周知していく。また、ブラッシング指導等による予防の指導にも取り組んでいく。
- ・交通モラルやマナーを遵守、交通社会の一員としての自覚を喚起させ、交通事故の絶無を図る。また、自転車事故については、他校の事例や交通事故の悲劇等を踏まえ、引き続き全校集会やHR活動等で生徒の内面に触れる指導の徹底を図る。
- ・自転車置き場での自転車の施錠については、二重ロックをするなど、根気強く指導していく。また、防犯登録、本校のステッカーを貼った自転車に乗ってくるように指導する。
- ・スクールカウンセラーによる教職員に対する校内研修、ケース会議を開くなど教職員への相談等の対応、悩みを持つ生徒に対する支援は生徒指導において大いに役に立った。また、1年生全員の面談も効果的であったため、次年度も継続して実施したい。
- ・東日本大震災や台風19号による水害の教訓に立って防犯教育を充実させる。また、生徒には「自分の命は自分で守る」を認識させ、災害時の行動を理解させる。

<4 保護者や地域との連携で鍛えます>

① P T A活動や地域住民との連携について

- ア) 公開文化祭において地域と連携した企画は大変好評であった。
- イ) 台風19号では地域の住民の方からの情報を共有しながら対策にあたった。
- ウ) P T Aや地区のP T A連合会、地域の行事へ積極的に参加し連携を深めた。
- エ) 全保護者で取り組むP T A活動を目指し、魅力あるP T A活動の充実に努めた。本校伝統のP T A主催の「朝のあいさつ運動」に関しては、今年度も保護者の参加が多く、積極的な協力をいただいている。一方、日程や保護者の勤務の関係から、今年度も特定の保護者の参加が目立ち、全体的に各行事への参加率が低かった。また、授業参観には保護者は来校されているが、その後のP T A総会には欠席する保護者が見受けられるため、P T A総会の出席率を上げるための持ち方等については今後検討が必要である。
- オ) 配信メールサービスを有効に活用し昨年度よりも登録数が増加しタイムリーに発信することができた。特に災害時の緊急時の連絡には有効であった。また、考査前や重要な行事の連絡についても効果的であった。
- カ) 地域貢献として学校施設を開放し、地域住民や子供達の教育文化活動に対し貢献することにより、地域振興に関わると共に学校施設を有効に活用する。
- キ) ホームページを利用し積極的に学校の情報を発信した。

【方策】

- ・各行事について、日程等の調整、魅力あるP T A活動や行事の精選を行い参加率の向上を図る。
- ・学校の情報をホームページやメールで早めに発信し、P T Aとの連携を深めた教育活動に努める。
- ・授業参観をはじめとして、保護者が気軽に来校できる雰囲気づくりを行う。

- ・学級減に伴う会員数の減少に対応するため、PTAの組織の見直しについても、今後検討していく必要がある。
- ・情報を保護者へ確実に伝えるためにも、配信メールサービスの登録をお願いする。
- ・地域貢献や学校施設有効活用として施設を開放し、地域住民や子供達の教育文化活動を支援すると共に健全育成に寄与する。

② 情報の収集と発信について

- ア) 行事ごとにホームページの更新を行い、可能な限りにおいて本校の教育活動における情報の公表に努めた。
- イ) 可能な限りにおいて保護者や地域住民の声を傾聴し、それらの情報を先送りせず教育活動へ反映できるものについてはすぐに対応するように努めた。

【方策】

- ・本校の現状を公表し、保護者や地域住民からの協力が得られる体制をつくるとともに、様々な情報の収集を行い、保護者や地域住民への要望や期待に応えるよう努める。
- ・教育活動の様子等をリアルタイムで継続して広報する。
- ・より多くの人にホームページを見て頂くため、ホームページの掲載様式を工夫する。

Ⅲ 広報の概要

1 目的や意図

- ・好間高校の状況を保護者の皆様や地域の皆様、更に多くの方々に広く知っていただくために、ホームページによる情報公開、更にはPTA会報、学級通信等を発行する。

2 実施計画・及び実施状況

- ①ホームページ：行事ある毎に随時更新する。入試情報や学校の情報をリアルタイムでお知らせした。
- ②PTA会報：保護者との合同制作である。11月と12月と1月に定例会を行い作成し、3月1日の卒業式に発行する。
- ③学級通信：全クラスの発行ではないが、クラスの出来事が保護者に伝わるように、具体的な事例を紹介し、発行している。
- ④進路便り：キャリア教育の方針に基づき、生徒の進路意識の向上のため発行した。
- ⑤図書便り：新着図書の紹介等を全校生徒にお知らせしている。
- ⑥保健便り：感染性となる疾病予防のために随時発行している。

3 配布対象、配布時期、配布方法等

- ①配布対象：全生徒と保護者
- ②配布時期：PTA会報は3月1日発行。その他の通信は、不定期。

4 実施してみても反省点等

- ・本校OBであり在学中には柔道部に所属していた「芸人あかつ」さんが公開文化祭時に訪問し後輩を激励してくれた。テレビ局、マスコミ等も取材の為に来校し、学校の現状と魅力を広く広報していただいた。
- ・学校と家庭と地域が連携し、よりよい学校作りを推進するためには、広報活動は欠かせない手段であるため、今後も継続して実践する。また好間高校の広報活動に関しては、保護者から高い評価をいただいている。地元の中学生は、ホームページから情報を得るなどして、入学を希望した生徒も多かったようである。今年度も地元のマスコミには3年連続国公立大学の合格など、〇

Bも含め地元住民が喜びに沸く出来事が続き、大変お世話になった。今後も開かれた学校作りのために、継続して広報活動に尽力する。

IV 次年度へ向けて

1 評価結果の特徴、自己評価実践の評価等

・資料からも理解できるように、昨年度よりも生徒・保護者・評議員の評価の精度が高まった。ただし、教職員の評価は昨年度よりも謙虚さが目立った。職員同士のコミュニケーションを活性化し、組織が有機的に機能するような学校環境に整備すると共に、個々の能力が生かされやすい職場環境作りに取り組んでいく。

2 自己評価全体の次年度の取組について（ビジョン・組織・年間計画での反省点に基づいて）

・今年度の好間高校の総合的な結果として、概ねビジョンが達成されたと分析できる。特に校長のリーダーシップの元、多くの行事が大成功に終わり、多くの成果が目に見える結果として表れたことは、好間地区の住民にとっても大きな励みとなった。このような結果となった要因の一つとして、組織的な学校運営の成果があげられる。各組織が全体を考える職務遂行が出来たので、「チーム好間」が実現できた。生徒と保護者と教職員が一体となり、今後も継続して実践していく。

3 次年度へ向けての課題、改善点、重点努力事項、展望など

・開かれた学校作りを一層推進していくため、来年度も引き続き学校評議員の皆様からの協力を得ながら魅力ある学校作りに努めていきたい。また、喫緊の課題である職員の多忙化解消についても評議員の皆様からの意見を元に改善していきたい。

4 終わりに

・今年度は台風19号により大きな被害を受け、授業や部活動等学校生活において不便な場面が多く見られ3年に1度の公開文化祭の開催も危ぶまれた。しかし、教職員の熱心な指導と生徒達のひたむきな姿勢、加えて保護者の献身的な協力のお陰で好評のうちに開催することができた。また、授業や部活動においても活動場所が制限され不便を極めたが、内容について工夫を凝らし、また活動場所の確保に奔走し、活動を継続することができた。今回を機に学校を取り巻く関係者の絆がより深まった1年でもあった。

もともと他人とコミュニケーションを図ることがそれほど得意でない生徒達ではあるが、教員がきめ細かく、寄り添った指導を行うことにより、見通しを持って物事に取り組めるようになり、心身共に大きく成長する生徒が多く見られた。多様な教員の資質を最大限に生かしながら、更に活性化した好間高校を目指したい。

また、今年度は地域貢献も視野に入れ、部活動の活動状況を調整し、可能な限り学校施設の開放を意欲的に行った。今後も地域との関わりを深めながら地域と共に歩み、信頼される学校作りを目指したい。

今後も各教職員の自己の客観視の深化を促し、生徒一人一人の多様な学びを実現し、夢と希望に溢れた充実した三年間の好間高校生活を展開する。来年度は特に教育課程と教育課程外の活動を連携させたカリキュラムマネジメントを実践し、生徒達が、主体的で、協働的で深い学びを体現していきたい。